

③ユートピア（理想郷）の現実「逆ユートピア（暗黒社会）」

「ユートピアはつねに自由の敵である」

このベルジャーエフの名言のとおり、ユートピアを目指す革命すべては、フランス革命にしてもロシア革命にしても、その大量・無差別殺戮に見るごとく、自由を窒息せしめ、自由を死に至らしめた。ユートピアはたしかに自由を破壊する、自由の敵である。

以上のことは、何も現実の政治や政治哲学だけでなく、**ユートピア文学**においても疑う余地なく成立している。ユートピア文学を代表する三代名著は人間の自由の圧搾をもって理想社会／完全社会として描いている、**トマス・モア**の『ユートピア』（1516年）と、**カンパネラ**の『太陽の都』（1602年出版は1623年）および**カペー**の『イカリア旅行記』（1840年）である。この三著とも、人間の理想社会は自由ゼロの全体主義体制だとしてそれを描いている。

それなのに、これほど戦慄すべき恐怖の全体主義の政治体制を理想とする怪奇なユートピア文学に対する**拒絶反応が、自由社会において必ずしも鋭敏ではなかった。**むしろ、**ユートピア**という言葉に**甘美なロマンチックの意味あいを夢想する。**だから、ユートピアという語は近代から現代においても何世紀にもわたって消えることなく、むしろより頻繁に未来への進歩と展望を象徴する言葉として使用されてきた。この事実は、自由社会の一般の人々には、単なる無知や誤解というよりも、全体主義への無責任な憧憬の感情がそれなりに根強く潜んでいることを示してはいないだろうか。

物事は、冷静に思考することが必要である。つまり、あなたの思考するユートピア（＝理想郷）とは何か、どんなものかを明確に説明でき、設計できるのか。そしてそれを現実社会に存在させる方法があるのか。未来永劫、実現できないから理想郷（ユートピア）というのではないか。そう思考すれば、ユートピア文学などという文学の**名称自体が、不可思議であり、奇怪であり、極めて有害であるような気配を背後に感じ取るはずである。**いや感じ取らなければならぬ。

●モアとカンパネラとユートピア文学

『ユートピア』や『太陽の都』などが描く**理想の社会**とは、驚くことなかれ、修道院や刑務所や軍隊の生活と同一である。自由ゼロである。それはまた、あ

の陰惨であった七十四年間のソ連の共産体制社会ともまったく同じである。まさしく全体主義的な社会のそれである。

モアの『ユートピア』で言えば、「ユートピア」国での生活は、実に機械的かつ画一的に定まっている。また、服は仕事の時は質素な皮革製のものでほぼ七年間着用。その他は二年に一着程度更新。粗末で質素であることを絶対原則とする。宝石や金・銀への蔑視観の教育。結婚は、女性は十八歳以上、男性は二十二歳以上、それ以前の処女喪失等は処罰される。犯罪処罰の法規はなく（「法の前の平等」でなく）、市会がそのつど裁定する。重犯罪は奴隷（年中無休の重労働）に処する。このシステムは、反革命罪で強制重労働収容所送りとしたあのソ連とそっくりである。

むしろ、私有財産は否定され、貨幣が無い点でも、やはりソ連体制と極似する。二十世紀の共産諸国の通貨はあるにはあったが、市場経済のそれとは異なり、物々交換の代用切符や軍票に似たものであった。また、宝石を子供のオモチャにしたり、金を囚人をつなぐ鎖に用いたり家庭の便器に使用することも、貧困・無財産を価値とみなし裕福を憎悪する、二十世紀の共産体制に通じている。

プラトンの『国家』とモアの『ユートピア』の双方を後継する思想的系譜において書かれたカンパネラの『太陽の都』においては、その全体主義性はより峻厳となり、そこには自由が呼吸する余地がほとんどない。カンパネラ（1568～1639）は貧民の子であり、（カトリックの）ドミニコ修道士（十四～二十一歳）となり、しかし異端として告発され迫害され拷問されたその獄中において数々の著を書いた。『太陽の都』とはその著作の一つである。獄中にあること監禁や幽閉を含めて総計三十二年のも及ぶ。不撓不屈の精神の持ち主であるが、正常な人間ではない。「ロボコップ的な狂人」というべき人物であった。

この理想の都市国家は政教一致であり、「太陽」と呼ばれる「形而上学者」の統治者がいる。生まれや身分においても、カンパネラ自身を統治者としてイメージしている。つまり、カンパネラは自分自身を「太陽」と信じているのであり、やはりルソーと同じタイプの狂人であることは間違いない。そして、食糧・栄養・娯楽・婦人(女性)が共有の共同生活体である。すなわち、私的所有権の絶対拒否に立ち、個人の利己心が一掃されて存在しない。ただ、公共心のみ人間を理想としている。『共産党宣言』そのものである。

また、家族否定、日常における友人否定に立脚しており、「中間組織」が絶滅された共同体生活を理想としている。レーニン／スターリンのソ連体制であり、金日成・金正日の北朝鮮体制そのものである。

この理想の共産国家は、われわれ一般の常識において例えてみれば、この地球上に男性の刑務所と女性の刑務所しかなく、種族保存のため、双方の刑務官の命令と監視下で子づくりをさせる（むろん相手を選ぶ権利はない）、そのような国家である。

「**プラトン⇒トマス・モア⇒カンパネラ⇒ルソー⇒マルクス⇒レーニン**」
とこのユートピア思想の流れは直線的である。マルクス・レーニン主義の国家全体とはソルジェニーツィンによって『収容所群島』と正しく名付けられた、完全な刑務所であったように、ユートピアの共産社会が現実にこの世に実現すれば“刑務所国家”にしかなりえないのは、このようにカンパネラ以降、初めからそれを理想としているからである。また、ルソーの『社会契約論』の描く社会とこの『太陽の都』が全くの同一であることは、「社会契約」とは、国民（人間）が狂信的宗教者（哲学者）と契約を結びこの狂信的宗教者が刑務官となる刑務所の囚人となること、それを意味している。

ところで、社会主義思想とはユートピア志向であるから、社会主義化論がユートピア文学となってもおかしくない。先述のフランス人のエティエンヌ・カベール『イカリア旅行記』（1840年）はその先駆であるし、米国のエドワード・ベラミの『顧みれば—2000年～1887年』（1888年）や、熱烈なマルクス主義者でありアナキスト的でもあるモリスの『ユートピアだより』（1891年）などもこの分類に入るだろう。なお、『イカリア旅行記』も『顧みれば』も、それぞれの国でベスト・セラーになった。

カベールはバブーフの系譜にある社会主義者であり、社会主義革命が未完で終わったフランス革命を再生させ続行させ、完全平等の社会を創造することを夢想した。同じ服、共同食事、物資の国家管理と配給、独裁者（イカール）による独裁政治体制など、最悪の社会主義社会そのものを描いたのであった。

一方、ベラミは、米国人らしく暴力革命のない「進化」によって米国が国家統制至上主義の社会主義的な体制の国家となり、私有を廃止した共同（協同）の無階級の理想社会になることを描いた。ベラミ自身が跋文で、「本書は進化の

原則にしたがって、人類の、特にこの国の、産業と社会の発展の**次の段階**の予測を全く真剣に意図した」と自慢しているように、その背景にあるのは人間と社会が無限に進歩（進化）するとの信仰である。科学技術と産業の発展に無限の全能性を見る進歩主義の信仰である。（皮肉にも『顧みれば』の出版の翌年から東欧諸国の解放が始まり、1991年にソ連は崩壊した）

モリスは、そのアナーキスト（無政府主義者）的立場と労働運動絶対視のマルクス主義的立場から、ベラミを攻撃的に批判した。このベラミ批判の書が『ユートピアだより』である。国家否定と手工業時代の中世への懐古、それはモリスが都市文明の終末を妄想するからでもあったが、そこにはルソーからマルクスに脈うつ、全体主義（社会主義）の教理に潜む、文明や近代に対する同じ憎悪が潜んでいる。

● 「逆ユートピア」文学の反撃

前記のような**ユートピア文学**に対して、人間が知性で空想しその実現を目指すユートピア社会が、実は「**逆ユートピア**」（**dystopia**、**暗黒社会**）だと警告する一群の**未来社会小説**がある。**ディストピア文学**という。ザチャーチン（ロシア、フランスに亡命）の『われら』、ハックスリー（英国、米国移住）の『すばらしい新世界』、ジョージ・オーウェル（英国）の『1984年』などはその代表的なものである。

青年時代は共産主義者であったザチャーチンの『われら』は、レーニン体制下の1921年に執筆された。自由ゼロの理想が実現した「単一国」という未来都市の物語である。

ザチャーチン以後、逆ユートピア文学としてハックスリーとジョージ・オーウェルが続くが、ザチャーチンの『われら』は、**ドストエフスキー**の『地下生活者の手記』（1864年）からかなりの影響を受けたように思われる。この『地下生活者の手記』とは**ドストエフスキーのルソーに対する痛烈な批判の書**であり、また、ルソーの『社会契約論』が全体主義体制を目指すものだということを鋭く見抜いての世人への警告の書であった。

ドストエフスキーはこの『地下生活者の手記』のなかで**ルソーのことをフランス語で「自然と真実の人」（＝野蛮で虚妄の人）と揶揄している**。そればかりか、「悪をもって敵（上流階級）に復讐しようという穢らわしい下等な欲望」

の持ち主であるとも断じている。また、当時ロシアで流行したフリーエ社会主義を念頭に置きながら、それが（人間の知力<理性>を万能とする信仰であるが故の）合理主義的統制をすることによって創造される社会を「水晶宮」と名付け、このような国家権力が個人の何から何まで監視できる社会こそ人間に対する反人間的な奴隷化にほかならないのだと反駁し、ドストエフスキーは反・社会主義の旗幟を鮮明にしたのであった。

「水晶宮」とは共産主義共同生活体のことであり、そこでは「人生のことを一切計量し明示してくれる」ので人間が完全な行動をして、あらゆる社会問題が消滅しているのだが、そのような「水晶宮」社会こそが人間の精神を圧搾するものである、とドストエフスキーは怒りをぶつけている。

祖父があのだーウィンの直系弟子たる生物進化論の T・H・ハックスリーであるオルダス・ハックスリーの『すばらしい世界』（1932年）は、レーニンの共産主義体制の恐怖に対する風刺であり、ヒトラーのナチズムなどの出現を予告するがごとく独裁者「総統」を描き、全体主義体制の未来社会の暗黒と非人間性を告発する。

未来小説『1984年』（1948年）は、恐怖の共産主義体制が英国にも誕生するかもしれない悪夢を阻むためにその逆ユートピア性を訴えるべく、オーウェルが自らの命を削って自らの信条を結実させたものであった。

全体主義体制への死体解剖的な洞察力において、**オーウェル**は**ハンナ・アレント**と双璧と言うべきかも知れない。小説『1984年』が**アレント**の『**全体主義の起源**』に並ぶほどに不朽であるということではなく、後者は民衆抑圧の全体主義が実はこの民衆の政治参加において成立することを重苦しいほどに証明をなし、前者は共産主義体制の外（英国）にあつてソルジェニーツィンの『収容所群島』を先取りしているからである。また、オーウェルは、自由社会に絶対的な善の社会を夢想する浅薄で無責任な知識人の存在する限り全体主義が発生する危険は立ち去らない、と憂慮する点で**エドモンド・バーク**にも通じている。

- 『1984年』は、全体主義国とは、
- イ) 人類史上最悪の貧困
 - ロ) 「テレスクリーン」(TV+盗視聴器)による人民の私生活にまで至る二十四時間監視

ハ)「過去」に対する中傷と誹謗（過去・歴史の全否定）

ニ) 永続的な戦争

ホ)「戦争は平和である」「自由は屈従である」などの転倒語法（ニュー・スピークス）

ヘ) 仮想敵への条件反射的な憎悪感情教育

などなしには存続できない体制である、と全体主義の戦慄する現実を“1948年”に喝破している。レーニンの共産ロシアも金日成の北朝鮮もオーウェルの描いたとおりであったことは、のちに世界が知るところとなった。

●大衆はユートピア文学と訣別できるか

未来とは未知であり暗闇である。現在を棄てて跳躍的に未来に足を踏み込むことは危険の報いを覚悟しなければならない。しかし、過去よりも現在が、現在よりも未来が、良い方向に発展しているとの未来志向の確信が何らの根拠なく人類に広く一般化したのは近代以降であり、とりわけフランス革命を契機とする。恐らくは長足に進歩する科学技術と発展してやまない産業の成果に幻惑され、さらに宗教的権威の衰微とあの世の世俗化（現世化）がこれと複合したのであろうが、それだけではあるまい。

怠慢な人間や無責任な人間そして放縦な人間にとって、未来が現在よりベターであるならば明日の困難を予見して今日を真摯に生きる必要はないのだから、今日の瞬間をふしだらに享樂することが可能となる。指導する側のエリートであれ、指導される側の大衆であれ、**現在の諸問題を未来に託して（=先送りして）**現在の責任や生き方について逃避することが可能となる。ユートピアという麻薬から人類が卒業しない原因の一つは、このように**未来への責任転嫁**が可能となるからである。

それに加えて、これら怠慢、無責任、放縦な人間たちは、このユートピアを盲目的に憧憬する。1992年の米国大統領選挙でクリントン候補の「変化（change）！」キャンペーンや同じく2008年の米国大統領選挙でのバラク・オバマ候補の「We say, we hope, we believe, yes we can (change)! や Change Has Come to America.」が有権者の過半数獲得に効果があったように、**変化は望ましい方向の変化しかないという迷信**を絶対的に確信しているからである。将来への変化はすべて福音とみなしているからである。「変化」すらそうなら、社会の全面的「変革（革新）」のアピールはより拍手喝采を受けることになる。**「変革」によって自由の喪失や幸福の喪失などが生じることを、想像することができない。**だから、**正しい政治とは大衆を「地上のユートピア願望」**

「進歩の信仰」から覚醒させ脱却させること、それにつきる。

政治は、未来をバラ色に描くものではない。過去（歴史）に学びそれをもつて暗闇で危険に満ちた未来をほんの少しばかり照らしながら、試行錯誤と慎重な熟慮において現在の今日を日々努力していくだけの夢のない仕事である。完全に調和した社会とは、モアやカンパネラの描く自由の死んだ全体主義体制しかありえない。科学技術の激するような進展と産業革命以来二百年以上にわたる豊かさの上昇する時代にあつて、**政治というものを進歩の信仰の対象からはずして、若干の漸進はしても基本的には停滞的でしかありえない政治の本質をいかにして大衆に理解させるか、それが政治指導者や知識人の使命の一つである。**

ユートピアは、その文学を見ても哲学から生じた共産体制の現実を見ても、人間の人格を破棄（破壊）することによって生じる未来世界であり、そこでは人間の持つべき暖かい血は人間から抜き取られている。人間の倫理が消えて道徳のない未来であり、人間自身がモノになってしまう未来である。そもそも未来を夢想して現在を最善に生きようとしないう人間など倫理喪失の無頼の徒であつて、かくも即物的な人生しかできないものが建設する未来社会が即物的以外でありえるはずはない。

マンハイムの「歴史」についても同様であつて、彼の「歴史」はヘーゲルと同じ歴史哲学（歴史神学）の歴史であつて、歴史をある方向に向かつて進行しつつあるものと把握しておりそれを「洞察」（＝ヘーゲルの「世界精神」）と称し、それに従つて社会を「計画」し、「改造」することを「歴史を作ろうとする」と表現している。マンハイムはマルクス主義に立脚している。マンハイムには、そのような歴史主義の「歴史の創造」こそが暗黒のソ連体制の出現となつたことを理解できない。**ポパー**は、このようなマンハイムの歴史主義を批判して次のように指摘する。

ポパー曰く、

「全体論的な意味での歴史学、つまり、＜社会有機体の全体＞あるいは＜一時代のあらゆる社会的・歴史的出来事＞を明示する＜社会の諸状態＞に関する歴史学といったものが存在しうると信じるのは間違っている」

たしかに現在のわれわれとは未来と過去の間にある。**ハンナ・アレント**の言葉に従えば「**過去と未来の間の裂け目**」に住んでいる。伝統や慣習が希薄化し、

いやむしろそれらが放擲されてきた近代にあっては、「進歩の宗教」の魅惑力は高い。そしてそれこそが、われわれを未来主義（ユートピア主義）においやる。だが、未来にあるのは暗闇の深淵だけであることをわれわれはもう一度肝に銘じる必要がある。